

長谷川四郎全集

第四卷

長谷川四郎全集第四卷

一九七六年七月五日印刷

一九七六年七月一日発行

著者長谷川四郎

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―二一

電話東京二五五局四五〇一(代表)・一八四一(編集)

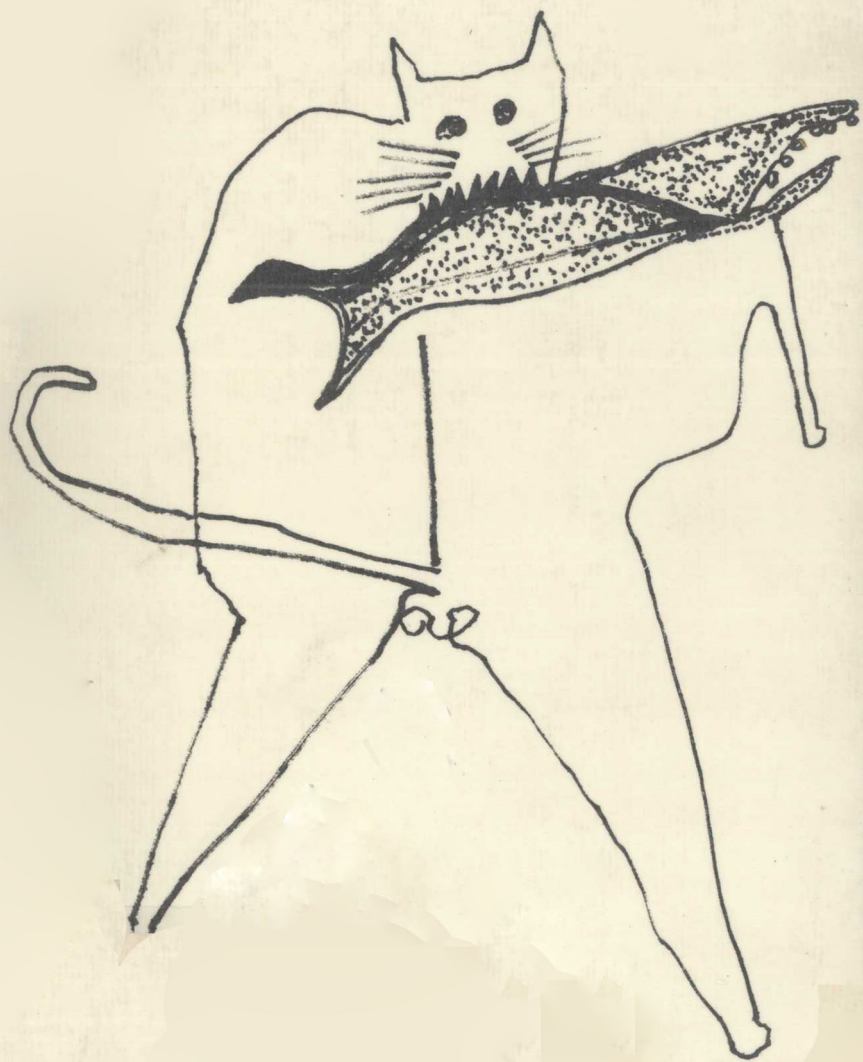
振替東京六一六二七九九

中央精版印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©一九七六年(検印廃止)落丁・乱丁本はお取替えいたします

長谷川四郎全集
第四卷



長谷川四郎全集

第四卷

晶文社



1

遠近法

炭坑にて

11

古本屋

50

小旅行

81

ある画工の話

108

2

港の釣り

145

函館の魚石

150

雑役夫

156

コマ太郎

164

隣人

176

車中三分間の対話

178

子どもたち

181

クボクヒヤン選挙記

188

- シベリヤの日本軍 193
- 『オルフォイスに捧げるソネット』の翻訳について 194
- 柳田国男編『日本人』 195
- 黒島伝治遺稿・壺井繁治編『軍隊日記』 197
- 『現代詩』四月号を読んで 199
- 猫 200
- 梅崎春生『ボロ家の春秋』 202
- サークル誌展望 203
- 三島由紀夫『ラディゲの死』ほか 220
- ドンは静かに流れる 222
- LETTRE DU JAPON 227
- サークルからの意見によせて 231
- 『鑄造』解説 234
- 井上孝『東京0番地』 235
- 小説の仕事 236
- エルザ・トリオレ『チエーホフ』 239
- トリストアンとイズー 240
- 昇曙夢『留守家族』 242

女流の作品集から

243

国木田独歩

245

ジョルジュ・デュアメル『希望号の人々』

249

『愛』について

250

野間宏『文学の方法と典型』

251

七つの罪の一つ

253

〈母校を訪ねて〉法政大学

255

第二十七回メーデーに参加して

256

井伏鱒二『漂民字三郎』

259

埴英夫『自由の樹』

260

ショロホフ『静かなドン』

261

民芸『最後の人々』

262

芥川也寸志『私の音楽談義』

265

荒正人『戦後文学の展望』

266

ジャンヌ・モンテュペ『紅い泉のほとり』

267

『リルケ読本』読者に・編者あとがき

269

作者のノート・4
解題 福島紀幸

294

283

1

遠
近
法

炭坑にて

1 マリユートカの場合

マリユートカという名前の炭坑が岡の中腹にうがたれていた。朝早かった。一面の雪景色であった。岡は傾斜のゆるやかな低いもので、このあたりのひろびろとした高原を形成している起伏の一つであったが、高原はこの炭坑のうがたれた岡のところでおわっていて、そのふもとからは平らな野原がはじまっているのだった。太陽はまだ現われていなかったが、その先ぶれの光が射して、空には雲一つなく、晴れて、空気はどこまでも澄んでいた。雪は非常に軽く、こまかに出来た粉雪で、何日か前の夜間に降ったまま、積っているというよりも、地面にうつすらと附着しており、決して溶け去るということがなく、そのかわり少しでも微風が吹くと、それにつれてすぐ渦を巻き、いつの間にか、どこかへ立ち

去ってしまい、あとには枯れた草と凍った黒土が現われるのだったが、しかし今は空気は少しも動かなかったし、雪はじっと静かにしていた。この冷えきった雪景色の中を、遠く、一群の人が黒い行列を作って、野原のむこうからこの岡の方へと、だんだん近づいてくるのが見えた。さらによく見ると、その行列のたどっている一筋の細い足跡路が白の中に白くついているのが見えた。一方、この炭坑の入口から暗い坑内をのぞいてみると、そこには小さな螢火のようなものが幾つか点々とゆらいでいるのが見えたが、それらは仕事をおえてぼつぼつ地上へのぼってくる坑夫たちの安全ランプの火であった。

黒い行列を作って雪の中を近づいてくる人たちは、遠くの、煙が垂直に少しばかり立ちのぼっている小さな町の方からやって来たのである。一瞬の後、太陽が地平線に現われて、朝の最初の光線が空中にひろがった。すると、今まで眼に見えなかった、またたきごとに点滅する、非常に小さな、微生物のような、きらきら光るものが空中のいたるところに無数に見えてきたが、これは凍

った空気のやいばが日光にきらめいているからであった。それと同時に暗い坑内から地上へ出て来た人のランプは、無辺の朝日に会って、急に光を失ってしまった。そのかわり、石炭の粉ですっかり黒くなったその人の顔に氷花が咲いた。自分の吐き出す息が自分のまつげに凍りついたからである。寒冷な朝の空気現象と炭坑の交替時間がこで出会っているのだった。黒い行列の人たちはさらに一段と近づいてきた。

マリュートカ炭坑の穴、つまり坑道は二つあって、一つは車道、もう一つは人道であった。炭坑危害予防の規則によれば、坑夫たちは必ずこの人道を通して出たり入ったりしなくてはならないことになっていた。かれらは初めて炭坑へ入る前にこの規則を学ばされたが、それは規則中の規則、つまり規則を守るといふ規則を守るためであった。しかし実際には、よくあることだが、この規則は守られていなかった。きりはへゆくのに、かれらはいいてい車道を歩いていったが、それはその方が近かったからである。そして、この車道を歩いていて最も危険なことは、先生が図に書いて説明したように、トロッコがそれを引きあげている鋼索からはずれて逆行して来ることであった。歩いている者の足にはほとんど感ぜられないくらいい坂道の斜坑ではあったが、若しも石炭を満載した百キロからのトロッコがなんら引き止めるものなく、そこをくだって来るとしたら、それは相当危険であると言わなくてはならなかった。で、そのような場合にそなえて、車道の両側には一定の距離をおいて、トンネルの壁にあるような、人ひとり隠

れることの出来るくらいの凹所がもうけられていた。また、トロッコの枕木には、これまた一定の距離をおいて、トロッコの逆行をくいとめる安全装置がついていて、これは捕獲器（ウロヴィーテリ）という名で呼ばれていた。けれども、そのような事故は、少なくとも現に自分の仕事場や或いは自宅へいそぎつつある者には、おこりそうにも思われなかったのである。鋼索はびかびか光る太い頑丈なものであったし、トロッコがそれにひつかかっているカギは、これまた鉄製の太いもので独特の形をしており、人間が手をそえてやらないかぎり、みずからはずれることなく、ありそりに思われなかった。事故はそれが発生したとき初めてそこに存在するものであった。で、万が一、トロッコが逆行し脱線し突進して来たら、すばやく、最寄りの壁の凹所に入って、びたりと吸いついておれば、まず無事だったであらう。いや、その前に捕獲器がトロッコを捕獲し、その場に捻じ伏せてくれたことであらう。

鋼索は二本、平行して、坑道の天井近くに張られていて、一本は石炭を積み込んだトロッコを引っぱりあげ、一本は空っぽのトロッコをきりはへおろすものであった。このようにそれは二本あるように見えただけでも、実は非常に長い一本で、それは畢竟するに無限軌道を形作って、ぐるぐる廻っていたのである。つまり平行している二本の鋼索はそれぞれ反対の方向へ全く同じ速度でゆっくり動いていたのである。耳をすますと、天井から鋼索をつるした滑車のまわる音が絶えず聞えていた。

さて、黒い行列の人たちが岡に到着し、坑内の人たちはますます

す多く地上に現われて来た。交替時間であった。ランプ置場は、これから坑内へ入る人とこれから家へ帰る人とで、一とき騒然となった。この時間が過ぎると、あたりはまた静かになった。帰る人は帰ってしまったし、安全ランプに火をつけて坑内へ入っていった人々は、八時間の労働がおわるまで、地上へ出て来ないのである。

やがて太陽が高くのぼっても、人影のまばらな地上の空気は少しも暖かくならなかった。このマリユートカ炭坑の炭坑長はスコイビチンという名前で、がっしりした中肉中背の、少し猫背の、そして細面の浅黒い、ワシ鼻の、トビ色の髪をした、髭を剃ったあとのいつも青々とした三十男で、めったに坑内へ入ってくることはなかったが、入ってくる時は坑夫たちがみんな石油ランプを持っているのに対して、とくべつ明るい探照燈みたいな電燈を携行していたので、すぐその人物とわかった。かれはその電燈を胸のところにあてて、鋼索の運行工合やレールと電線の状況などを照らして見た。およそ諸設備万端を点検し、また坑道が設計通り進行しているかを調べ、もしもどこかに故障のおこりそうな箇所があれば、それを発見し処置するのが、かれの任務の一つだったからである。労働者たちのはたらきぶりについては、かれは監督に一任した形であったが、それでも通りすがりにその非常に明るく携帯電燈で、労働者たちのはたらいているところを、まるで設備の一部でもしらべるように、照らし出して見たのである。たいいていの場合、かれはうすい唇をむすんで一言も口をきかなかった

が、口をひらく時はきまって冗談口で、批評らしいことはなんにも言わなかった。この炭坑長自身も、いうまでもないことだが、炭坑の出入りには人道ならぬ車道を用いていたし、時には、禁断の空トロッコに乗って、きりはまでおりて来たりしたものである。そんな時、空トロッコはヘッドライトをつけた夜の電車のように見えた。

それでは、せっかくの人道はどうであったかと言うと、たいいていは仕事をおえて帰るときに、そうひんばんではなかったが、とにかく利用されてはいた。そこは暗くて静かな、深い洞穴のようで、おまけにいつも排泄物の臭気がうつすらとただよっていた。というのは、炭坑の中には便所の設備がなかったので、坑夫たちは、かれらの用語でいうと、へ自分の体内を調節するために、そこをときどき活用していたからである。だから、人道をゆくときは、危害予防の規則には書いてなかったけれども、あんまりはじつこの方を歩いてはいけなかった。

太陽は高くのぼりそうで、あんまり高くのぼらなかった。それはもう正午の位置にあった。しかし空気は少しまぶしくなっただけで、依然として冷たく、少しも暖気を与えなかった。ひとびとは地下ではたらいっていた。

マリユートカ炭坑においても、その作業の最前線といえば、もちろんきりばであった。まず、長い電気ドリルを持った専門の大男が、坑道のどんづまりにやってきて、その石炭の壁面にかなり多数の細く深い孔をうがった。こうして、またべつのきりはへ移

ってゆくと、そのあとにハッパ専門のずんぐり肥ったタートル男がやってきて、うがたれた孔の中に爆薬をしかけ、導火線に火をつけたのである。危険信号の呼子が鳴った。ひとびとはそのきり、はから遠ざかった。やがて、人払いされた中に爆発の音がして、そのあたりの坑道に灰色の奇妙な臭気の煙がぼんやり電燈に照らされてたどった。坑道の中には巨大な通風器がいつも廻転していて、空気はたえず一方から一方へ流れていた。煙はそれに乗ってだんだんとうすれ、消えていった。そして積込夫が大きなシャベルをかついで、そのきりはへ入ってゆき、トロツコ係りがトロツコをそこへ押してゆき、石炭の積込みがはじまった。それは休息することなく一挙にやらなくてはならなかった。こうして積込みが完了すると、重くなったトロツコは人に押されるか馬に引っぱられるかして、鋼索の運行している所まであげられ、そこで鋼索にひっかけられて、坑外へ送り出されていった。空虚になったきりはへは、こんどは支柱夫が入って支柱を立て、線路夫が入って線路をのびした。こうして新しくハッパをかける準備ができ、こうして坑道は掘りすめられていった。坑内はいくつかの小坑道にわかれていて、きりはいくつもあり、坑夫たちは一服すると、順ぐりにきりはからきりはへ移動し、同じ手管でつぎつぎと働いていた。幾人かの監督が互いに連絡して、坑夫たちをつねにうまく配置しなくてはならなかった。そしてこの監督たちを、炭坑長がちゃんと把握してはならなかった。無限軌道をぐるぐる廻っている鋼索をしばらくでも無駄に遊ばしてはいけな

った。つぎつぎと一定の距離をおいて、石炭を満載したトロツコが地上へ一列励行で送り出されなくてはならなかった。

そして事実、今、雪におおわれた昼の岡の地下では、労働はそのように行われていたのである。ときどき地上に現われ出た監督が炭坑長に報告していた、——万幸、秩序の中にあり、と。

よい炭坑長というのは、自宅にねころんで小説を読んでいてもかまわない、炭坑がきちんとまっぴんなく動いて石炭がつぎつぎと掘り出されておれば、それでよろしい、と言われる。この点から言えば、マリユートカ炭坑長スコイビチン氏は、まず、中位の炭坑長であつた。かれは坑内にはめつたに入らなかつたけれども、とにかく事務所には毎日ちゃんと出ていたし、炭坑はどうやら秩序よく動いていたからである。炭坑長の家はだいたいぶはなれた部落の中にある一戸建てで、他の家々よりも少しばかり立派であつた。玄関正面には裝飾用のドーリア式円柱がついていたし、下見が黄色味を帯びた褐色のペンキで塗られたりしていたが、なによりも他の家々とはちがっているところは、かれらがみんな便所を屋外に持っていたのに対し、かれは自分の便所を屋外ではなく屋内に持っていたことである。妻と女の子と小さな書棚のあるこの自宅から、かれは炭坑専属の乗用馬車で通勤していた。乗用馬車といっても、百姓などの四輪荷馬車と同じ造りで、ただ車体にワグがなく（というのは、人間は荷物のようにころげ落ちないからであろうが）平らに作られているだけであつた。この平らな車体の上にクッションがわりに乾草を敷き、炭坑長はその上にお尻

を握え、両脚をそとへ垂らし、子供のようにならぶらやりながら、事務所へやって来るのだった。

事務所は炭坑のとはくちから少しはなれた所に立っている木造小屋であった。小さなものではあったが、それは労働者たちのたまり場と、長方形の廊下と、それに幹部たちのいる部屋とから出来ていた。労働者たちのたまり場は、これまた炭坑の交替時間にもなると、一ときにぎやかになる所であった。そこにしばらくうるついていると、年とった馵者がなにかの古物語を仕方話して聞かせるのを聞くことも出来たし、また、ドイツ軍の捕虜になっていて、それから連合軍にひきとられて帰ってきて、こんどは強制的にここへ送られてきた兵士あがりの炭坑夫の、ヨーロッパの土産話を聞くことも出来た。ネグロの兵隊がいかに黒いかということや、アメリカ軍のパンがいかに白いかということや、またフランスの女のお尻や毛の生えた部分のことなど。

幹部のいる部屋には三つの事務機が中央にかたまっていた。そのうちの一つは炭坑長のものであり、もう一つは測量技師のものであり、第三の機はべつにだれのものということはなかった。幹部は炭坑長と測量技師の二人だけだったからである。そのほかにノルマ計算係りという若い男がいたが、これは他の炭坑もかけもちで、ときどき計算器をぶらさげてやってきた。かれはたいいてい、幹部のいる部屋でなく労働者たちのたまり場で仕事をしたが、これはこの方が仕事がいやすかったからである。そこにはそのための粗末な木の机が一つおかれていたが、これはまた労働者たち

の腰掛けにも使われていた。給料日になると、このノルマ計算係りは、計算器でなく、小さな手提金庫をかかえてやってきた。そして炭坑長がみずから金をみんなに支給したのである。このとき、いざこざのおきるようなことはなかった。労働者たちはたまり場で、或いは天気の良い、少しでも暖かな日には、戸外で、おしゃべりや日向ぼっこをしたりしながら、自分の順番が来るのを待っていた。

肺をわるくしてしばらくイルクーツクのサナトリウムにいったという測量技師は中年のじむさい口髭をはやした小男で、坑内を測量して歩くのが、その仕事であった。かれはそのため、助手の悪童に測量器をかつがせ、日に一回は坑内へ入っていた。そしてその少年に坑道の天井から小石を結びつけた糸をおろさせ、それを測量器でのぞいていた。のぞきながらかれは、ほんの少し右へ、とか、ほんの少し左へ、とか言って指図をした。少年がそれに従って分銅の位置を少しずつずらした。こうして坑道の中をまっすぐ奥へ白い糸が張られ、その方向へきり、はは掘りすすめられていたわけである。この坑道が予定のコースを進んでしまうと、こんどは外部の岡の上からタテ坑が掘られることになっていた。すでに岡の上には、その地点を示す標識が立てられていた。このタテ坑が下の斜坑とうまく出会うようにすること、これが測量技師の仕事であった。そのほかに、少なくとも現場においては、かれはなんにもしていなかったの、かれの使っている悪童をはじめ、坑夫たちの中には、かれを怠け者だと思っていて、そのよう